

産業建設委員会 行政視察報告書

視察日程 令和7年5月21日（水）～23日（金）

視察先 新潟県燕市

新潟県柏崎市

参加者 委員長 猪川 譲 副委員長 横内 博之

委員 下司早智子 三浦 克彦 真鍋 利憲 真鍋 幹雄

【新潟県燕市】調査事項：「燕市公共交通基本計画」を軸とした公共交通の取組について

人口75,617人 面積110.94平方キロメートル 議員定数20人（令和7年3月末時点）

○「燕市公共交通基本計画」策定の経緯

燕市では、人口減少、マイカー利用の増大、少子高齢化の進展などの社会情勢の変化、バスの利便性の低下などにより、市内のバス利用者が減少し、バス事業者の経営環境は圧迫され、これに伴い市の財政負担にも影響を及ぼしていた。

また、市内には多くの市街地や集落が分散形成されているが、市民の生活交通の均質なサービスの提供ができていない状況にあった。

超高齢時代を迎えようとしている中、高齢者の外出機会の増進を支援すると共に、高校生をはじめとする学生の通学手段を確保し、市民の暮らしを支える持続可能な公共交通を整備するため、関係機関との協議の基、平成25年3月「燕市公共交通基本計画」を策定した。

1 燕市の公共交通の経過

- ・合併前から各地区内を巡回するバスが8路線運行していた
- ・平成19年（合併後）に、3地区内を結ぶように、循環バス「スワロー号」の運行開始
- ・平成25年3月に「燕市公共交通基本計画」を策定
- ・平成24年度に巡回バスを廃止、平成25年度からデマンド交通「おでかけきらん号」の運行開始
- ・新庁舎設立（平成25年）と同時に、スワロー号の路線延伸、バス停の増設・廃止等を実施
- ・平成27年におでかけきらん号を弥彦村まで拡大し運行開始
- ・平成27年にやひこ号を運行開始
- ・平成31年に「燕・弥彦地域公共交通網形成計画」を策定
- ・令和6年3月1日に県央エリアに基幹病院が開院、これに併せ、スワロー号の時刻表等を再編
- ・令和7年3月に「燕・弥彦地域公共交通計画」を策定

2 隣接する弥彦村との広域連携について

[弥彦村の問題点]

- ・平成15年に民間事業者による路線バス運行撤退
- ・村営無料巡回バスを運行したが利用者少
- ・村民の生活圏として燕市への交通手段は必要不可欠

[総務省が示す定住自立圏構想に基づく施策を展開]

- ・平成26年 燕・弥彦地域公共交通会議の発足
- ・平成26年9月に燕・弥彦地域定住自立圏形成協定を締結
- ・平成27年3月に燕・弥彦地域定住自立圏共生ビジョン策定

[定住自立圏形成協定に基づき推進する具体的取組]

- ・燕・弥彦地域公共交通計画策定事業・広域循環バス運行事業やひこ号の運行
- ・予約制乗合ワゴン車運行拡大事業

○燕市循環バス「スワロー号」について

[運行概要]

- ・運行経路 長辰～吉田駅・燕駅～燕三条駅（行程：97分、34.0キロメートル）
- ・運行便数：1日14便（平日のみ）
- ・運賃：100円/回（小学生以下 無料）

○「おでかけきららん号」について

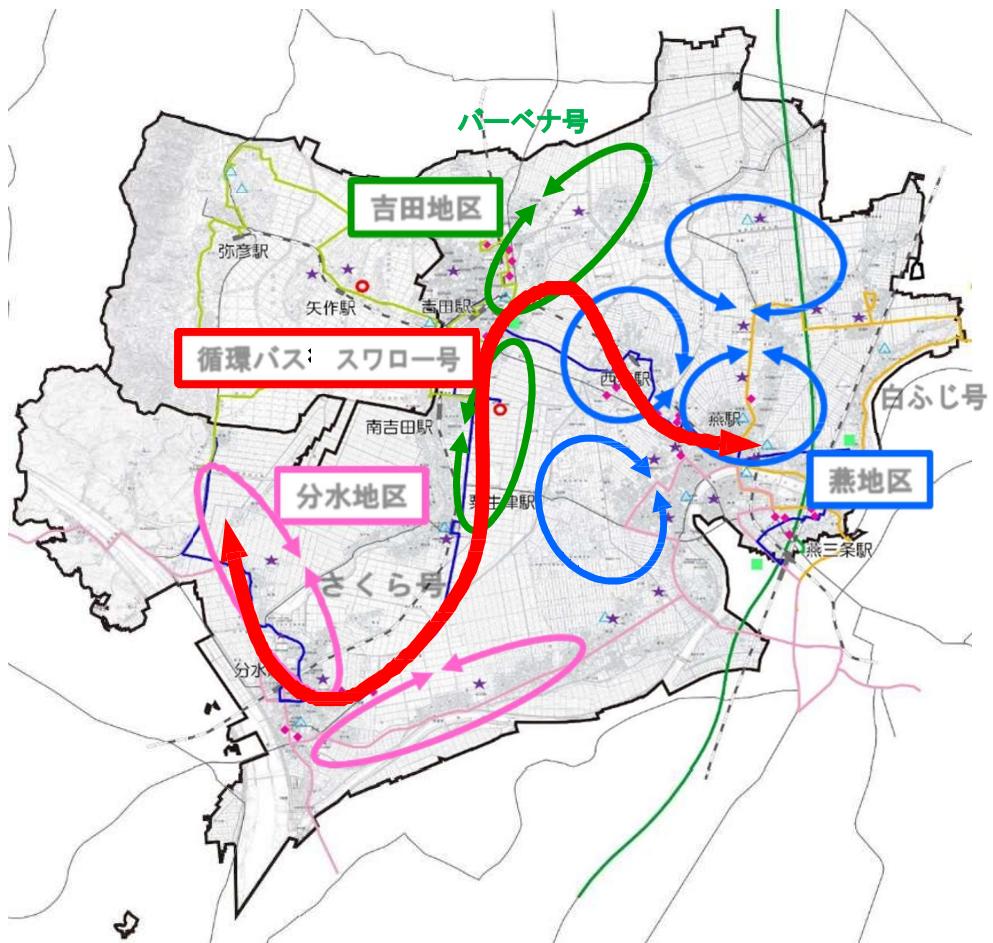
[運行概要]

- ・運行区域：燕市・弥彦村全域（2つのエリアに分けて運行）
- ・運行便数：10便（平日に1時間）
- ・運賃：300円/回（中学生100円 未就学児無料）
- ・運行主体：圏域内のタクシー会社6社
- ・運行方式：ドアツードア（電話予約）

○「やひこ号」について

[運行概要]

- ・運行経路：てまりの湯～弥彦駅～吉田駅～ビジョンよしだ（行程：82分、26.8キロメートル）
- ・運行便数：1日10便（平日のみ）
- ・運賃：100円/回（小学生以下 無料）



3 公共交通に係る財政負担について

路線バスについては、燕市が年間約1,500万円を補助している。

また、コミュニティ交通を運行するため、年間約7,500万円の経費が必要となる。そのうち、約2割が運賃収入となり、約8割を燕市・弥彦村の負担金と国庫補助金で賄っている。

国庫補助金の減額等の影響から、燕市・弥彦村の負担割合が増加傾向にあるため、今後、事業の持続可能性を踏まえた検討が必要となっている。

○運行経費

- ・デマンド運行業者の収入

運行費20,600円/日×6社 (利用料金300円×利用者数)

回数券販売手数料：販売枚数 × 3,000円×5%

国庫補助金1,000,000円×6社

- ・予約センター委託料15,231,700円

- ・デマンドシステム利用料7,922,773円

年間約48,000,000円 (令和6年度実績) うち、燕市負担額 約40,000,000円

4 課題と今後の取組における目標

- ・燕・弥彦圏内や周辺地域をつなぐ広域交通の維持と強化
- ・住民の日常生活を支える圏域内の移動手段の維持と強化
- ・公共交通サービスを担う人材や手段の確保
- ・公共交通に対する意識と行動の変容
- ・人々の移動に関わる様々な分野との連携

燕市行政視察まとめ

燕市では、平成25年3月に「燕市公共交通基本計画」を策定し、同年4月から公共交通空白域をカバーするデマンド交通「おでかけきららん号」の運行を開始した。特筆すべきは市内の幹線公共交通である循環バス「スワロー号」である。行程97分、34.0キロメートルの路線を1日7往復しており、運賃は、1回の利用につき100円、小学生以下は無料となっている。ニーズに応じて運行ルートを見直すなど、本市より人口が少ない燕市で予約制乗合ワゴン車や民間バス会社とコミュニティバスが共存し、市民の使いやすい公共交通網を構築している。

さらに日常生活圏が重なる燕市と隣接する弥彦村は、市町村の枠を超えて地域全体の活性化を図るため平成26年9月に「燕・弥彦地域定住自立圏形成協定」を締結し、連携する政策分野の一つとして「地域公共交通ネットワークの構築」を掲げた。そして、平成27年4月から弥彦村と燕市を結ぶ広域循環バス「やひこ号」の運行、同年7月には「おでかけきららん号」の弥彦村までの運行エリア拡大などを行った。直近では、令和6年2月に「弥彦村自動運転実証実験」を開始するとともに、既存コミュニティバスの運行サービスを充実させるなど、安心で快適な日常生活につなげる公共交通網の形成に常に前向きに取り組んでいる。

本市の公共交通の主な課題は、高齢化・人口減少に伴う公共交通の利用減少、路線バスの廃止、利用者の利便性低下、そして公共交通の利活用データ不足などが挙げられる。これらの課題を解決するためには、公共交通の利便性の向上、利用者を増やすための施策、そしてデータに基づいた運行改善などが求められている。

今回の視察では、これらの課題解決に向けた新たなヒントを得られることができ、大変有意義な内容であった。

【新潟県柏崎市】調査事項：「柏崎市観光ビジョン」を軸とした観光振興の取組について

人口75,627人 面積442.7平方キロメートル 議員定数22人（令和7年3月末時点）

○ 柏崎市観光ビジョン策定の経緯

柏崎市の観光入込客数は、平成25年の約418万人から、平成30年には、約340万人と減少した。年間の入込の約5割を占める、夏季（7月～9月）の観光とイベントが中心であり、これまで通年観光の実現と通過型観光からの脱却を目標に進めてきたが、観光入込客数の獲得に主眼が置かれ、前例踏襲型の取組を中心に行なった結果、新たな仕組みづくりや具体的な打開策を見いだすまでに至らなかった。

また、令和2年は、新型コロナウイルス感染症の影響により、飲食、宿泊業を中心に非常に大きな打撃を受け、市内の観光業は大きな転換期を迎えていた。この危機を教訓とした、観光スタイルを見いだすこと目標とし、柏崎市観光ビジョンの策定が進められた。

1 柏崎市観光ビジョンの計画期間

観光ビジョンの計画期間は、令和3年度から令和7年度としている。

計画前半の2年間を新型コロナウイルス感染症からの「立て直し・再編の期間」とし、後半3年間を「事業者自らが自立し、実行する期間」として位置づけ取組を進めている。

年度	令和3(2021)年度	令和4(2022)年度	令和5(2023)年度	令和6(2024)年度	令和7(2025)年度
	立て直し・再編の期間		事業者自らが自立し、実行する期間		

2 諸課題の認識と抽出

観光の在り方は、スマートフォンなどの普及により劇的に変化した。特に、旅行については、体験型のコンテンツが主流となった。

また、その販売手段は、店頭からインターネットへ、団体から個人へと変わり、従来の観光の在り方をマーケティングや情報発信を含め、改めて見つめ直す必要がある。

さらに、新型コロナウイルス感染症の影響により、これから形態は、よりゆったりとした空間、より安心できる環境づくり、接客、「おもてなし」が求められ、安さを競い集客数の増加を目指す従来の手法からその地域らしさやブランド価値を大切にする質重視に変わってきた。

このような観光ニーズの変化に対応するため、まずは、課題の抽出作業を行なった。

○抽出された課題

- ・情報発信能力

- ・時代ニーズの把握不足
- ・事業効果の検証を実施していない
- ・主眼は施設維持管理に向けられている
- ・庁内での情報共有や連携、必要な情報収集と現状分析が行われていない

3 抽出された諸課題をクリアするための基本戦略を設定

[諸課題をクリアし、将来の目標を実現するため、計画期間内に実行する3つの基本戦略を定めている]

(1) 「資源」のブランド化と「商品」への転換

「資源」を「資源」のままで終わらせず、「商品」として売り出していく。「資源」のブランド化を図りながら、「資源」と「資源」、「資源」と「人」、「資源」と「食」などの組合せにより新たな価値を創り出す。

(2) 市民参加型の組織で「商品」をつくる

市民自らが商品開発に関われるよう組織化を行う。将来的には、観光教育を行う機関としての機能を加え、次の担い手を育成する。

(3) 「商品」を売り込む

情報を発信するだけでなく、客から「検索」、「拡散」してもらえる商品開発や情報内容とし、共感する人々を増やす。また、常にターゲットを意識した情報内容とし、県外だけでなく、県内へのプロモーションも積極的に行う。

4 基本戦略を実現する上で取り組む5つのポイント

[基本戦略を効果的に実施するため、それぞれのポイントに重点を置いた事業を展開している]

- (1) 常に新しい視点と市民が満足する商品開発
- (2) 徹底的な情報発信の改革
- (3) 多様な資源を生かした海の柏崎へ
- (4) 個々の活動をつなぐ仕組みづくり
- (5) 民間の力が十分に発揮できるための行政の役割

5 今後の取組

・観光施設等の最適化

観光施設の機能や役割、利活用の可能性を検討し、必要に応じて、拡充や縮小、統廃合、譲渡などを進める

・観光分野のDX推進

デジタル技術の活用による、観光マーケティングに必要なデータの収集・分析、来訪者の利便性向上など観光産業の高度化を図る

・地域が一体となった戦略的観光誘客の推進

観光協会、旅行事業者、宿泊事業者などとの連携体制を構築し、各種統計データの収集

分析から、P D C Aサイクルに基づく戦略的な観光誘客を展開する

柏崎市行政視察まとめ

柏崎市は、豊かな自然と歴史・文化が魅力である。特に、海に面した美しい海岸線と、山々が織りなす景観が際立っている。

また、日本三大花火の一つである「ぎおん柏崎まつり海の大花火大会」や、恋愛パワースポット「恋人岬」など、見どころがたくさんあり、自然の美しさと地域文化が織りなす観光地として、多くの訪問者に豊かな体験を提供している。

このように多くの人々から「柏崎」が選ばれるためには、新たに何を見いだし、何を改善すべきなのか、何を残すべきなのか。この目標を「柏崎市観光ビジョン」で示している。

計画では、柏崎市の観光における諸課題を抽出し、それらを見極め、今後の進むべき方向性や目標を明確に設定し、新しいことに挑戦している。

観光施設や、魅力ある観光商品を確立するためには、「資源」のブランド化を図りながら、「資源」と「資源」、「資源」と「人」、「資源」と「食」などの組合せによる、ストーリー展開やパッケージ化が非常に重要であると学んだ。

また、計画の策定については、コンサルタントに頼るのではなく、観光行政に携わる市職員自らが策定している。このような積極的に取り組む姿勢も含め、本委員会の政策課題である観光振興計画の策定に当たり、非常に参考となる視察内容となった。